

## 地方から景気の手を読む

跡見学園女子大学マネジメント学部教授 山澤 成康

地方景気については、よく知られた「飛行機の後輪」説がある。たとえば、「九州経済は飛行機の後輪だ」というものである。飛行機の後輪は、離陸するときは最後まで地面に付いていて、着陸するときは最初に地面に付く。景気が良くなる時は他の地方に遅れ、景気が悪くなる時は他の地方に先駆けて悪くなるというものだ。これには、「山陰経済は…」[北海道経済は…][四国の経済は…]などのさまざまなバリエーションがある。地方景気以外にも、「ホテル業界は…」[男性の消費行動は…]などにも使われる。

確かに地方によって景気の波及には時間差がある。地域間の景気の波及は非常に興味深いテーマだ。そもそも、景気動向指数や日銀短観で使われるDI=ディフュージョン・インデックスのディフュージョン(diffusion)とは、波及という意味である。景気は波及するものだ。

日本経済は諸外国と比較すると驚くほど大きい。今話題のギリシャのGDP(2480億ドル、2012年)は埼玉県の県内総生産(2450億ドル、2012年度)とほぼ同じである。韓国のGDPと東京都の都内総生産、タイのGDPと神奈川県内の県内総生産、ポルトガルのGDPと福岡県の県内総生産はそれぞれほぼ同じだ。国ごとに景気が波及するように、都道府県ごとにも景気が波及していくと考えてもよいだろう。

景気は徐々に波及するということを考えると、全体に先駆けて動くところを捕まえれば、景気を早めに知ることができる。いわゆる先行指標だ。中小企業はサプライチェーンの最初の部分を担っている。このため、大企業に先駆けて業績が変動し、景気の先行指標となっている。事実、景気動向指数の先行系列には、「中小企業売上見通し」が入っている。世界景気に目を向ければ、台湾の半導体受

託生産会社(ファウンドリー)の業績が情報技術(IT)産業全体を予測するうえで重要なことも知られている。ファウンドリーはIT企業から半導体チップを受注して生産するため、完成品の需要動向がわかるためだ。

では、地方景気についても先行性のある地域はあるのだろうか。これまでさまざまな研究が行われてきたが、今のところ決定打はないようだ。

都道府県ごとに発表されている景気動向指数をみると、2007年前後のグローバル金融不況時に、いち早く景気後退に入ったのは鳥取県である。内閣府の景気基準日付によると、景気の山は2008年3月だが、鳥取県の景気の山は2006年10月とかなり早い。サブプライムローン問題などを先取りしたというよりは、公共投資の減少など地域固有の要因で不況になったところに、世界金融不況が追い打ちをかけたという感じだろう。ただ、鳥取県はその後の山(2011年4月)でも国(2012年4月)より早く動いているので、早めに動く傾向があるのかもしれない。

最近の一橋大学経済研究所の『経済研究』に載った研究(小野寺、上田、浅子「地方景気の先行性・遅行性 ―都道府県別CIIによる分析―」)では、景気に先行性があるのは、拡張期は山形県、鳥取県、福井県、後退期は宮崎県、鹿児島県、沖縄県だった。いずれも大都市圏から遠い地方だ。ただ、景気後退期は先行、拡張期は遅行という「飛行機の後輪型」の都道府県はなかった。この研究では「特定の県が常に先行性や遅行性を示すことはない」という結論である。

これまでの研究では、地方景気の明確な法則が見つかっていない。だからこそ、大発見の可能性のある「宝の山」の分野であるといえる。